

【作品タイトル】

『ゴールデンチケット』

【著者名】

太田 純平

【あらすじ】（139文字）

無職の青年二人が仕事探しをしていると、テレビから選挙特番が流れてくる。「選挙いく？」「いつでも何も変わらねえよ」——そんな彼らの発言を尻目にテレビのキャスターが告げる。「今回の選挙から、あなたの1票に100万票の価値が付与されるかもしれない、ゴールデンチケット制度が始まります」

【本編文字数】

5748文字

【登場人物表】

新井戸 宅（26） 無職

古森 守（26） 無職

ぴょん（46） 衆議院議員（男性）

大口（41） 秘書（男性）

キャスター

アナウンサー

投票用紙交付係

投票管理者

女子高生 A

女子高生 B

○ 新井戸の家・リビング（夜）

一人暮らしの狭く散らかった部屋。

ローテーブルには酒など宅飲みが残骸が。

新井戸宅（26）、PCで求人見ながら、

新井戸「なんかいい仕事ねえかなあ」

古森守（26）、顔覆うように求人誌見ながら、

古森「月給100万、未経験歓迎」

新井戸「おお？」

古森「年齢不問、残業なし」

新井戸「なにその求人」

古森「実働3時間、年間休日150——」

新井戸「（古森に飛びつき）俺それにする！」

古森「（求人誌から顔出し）あるわけねえだ

ろそんな求人」

新井戸「！？」

古森、新井戸に求人誌押しつけ、大の字に寝転がる。

その脇の戸棚の上には写真立てが。高校野球のユニフォーム姿で捕手の古森が投

手の新井戸の肩を抱く笑顔の写真。

古森、その写真の脇に飾ってある硬球を
天に向け投げたり捕ったりしながら、

古森「あゝあ、世の中カネだよなあ」

テレビ台の上にある小さなテレビ。長く
CM中だったが選挙特番が始まる。『衆
議院選前・党首討論会』と題し、キャス
ターとアナウンサーが番組紹介を始める。

古森、なんとなく目をやって、

古森「そーいや選挙いく？」

新井戸「行くわけねえじゃん」

古森「なんで？」

新井戸「いっても何も変わらねえよ」

古森「わかんねえじゃん」

新井戸「俺とお前が入れてもたったの2票だ
ぞ？　いったいなんの意味があるんだよ」

キャスター(TV)「と、思われる方も多い
ことから、今回の選挙から、ゴールデンチ
ケット制度が始まります」

アナウンサー(TV)「どのような制度です

か？」

キャスター（TV）「ハイ。全国からランダムに選ばれた方の1票に、100万票の価値が付与されるというものです」

古森「だってよ」

新井戸「（求人誌見て聞いておらず）ナニナニ？」

古森「今回の選挙から、誰かの1票が100万票の価値になるんだって」

新井戸「ふうん、だからナニって感じじゃね。ぶっちゃけ選挙いったらカネくれるとかじゃねえと」

キャスター（TV）「と、思われる方もいらっしゃるから、ゴールデンチケットに当選された方は、選挙協力金として100万円が支給されます」

アナウンサー（TV）「つまり今回の選挙から、投票された方に100万円が当たるチャンスがあるってことですね？」

○ スポーツセンター・外観（数日後・朝）
入り口に『投票所はこちら』の看板。

○ 同・投票所（朝）

若者で行列が出来ている。

その最前列に古森と新井戸が。

古森、投票用紙交付係員の前へ。

係員、古森の投票券をバーコードで読み取る。

古森、投票用紙を受け取り、中へ。

続いて新井戸も、投票券をバーコードで

読み取ってもらう。

読み取ったデータ見た係員の驚いた顔。

新井戸「？」

係員、慌てて立ち上がり、遠方にいる投

票管理者の男を手招きで呼ぶ。

呼ばれた投票管理者の男、係員とヒソヒ

ソ話をして、新井戸に、

投票管理者「ちよっと、こちらへ」

○ ゴールデンチケット

金色の投票用紙。

投票管理者（声）「こちらがゴールデンチケットです」

○ スポーツセンター・会議室（朝）

投票所と同じような作りで記載台がある。

新井戸、金色に輝く投票用紙の裏表見て、戸惑うような表情。

投票管理者「今回から始まりましたゴールデンチケット制度により、あなたの1票には、100万票分の価値が付与されます」

新井戸「ひゃ、ひやくまん、ぴょう」

投票管理者「また、不正防止のため、このように撮影する義務がありますことを、あらかじめご了承ください」

新井戸、部屋を見渡す。

脚立で固定されたカメラが数台、入り口から記載台までの動線を余すところなく狙っている。

投票管理者「それでは、ご投票を」

新井戸「えーっと」

投票管理者「（記載台を示し）あちらへ」

新井戸、戸惑いながらも記載台へ。

記載台には『第××回・衆議院選挙立候補者』の文字と、立候補者たちの名前がずらり。

新井戸「（独り言）誰がイイとかわかんねえよ」

投票管理者「私語は厳禁でお願いします」

新井戸「……」

新井戸、立候補者たちの名前を見比べる。
ふと気になる候補者を見つけたのか、し
ぶしぶ鉛筆を走らせて――。

○ ファミリーレストラン・店内（午前）

席に対座している新井戸と古森。

古森、封筒に入った札束を数えながら、
古森「97、98、99……やべえよホント
に100万じゃん！」

新井戸「シッ！ 声が大きい」

古森「すげえよ！ ヤバッ！ （周囲の客に）

すみませーん！ この人ゴールドデンチケツ

ト当たりましたア！ アライドタク君でー

す！」

新井戸「おい！ やめろよ！」

周囲の客の反応。女子高生グループがク

スクス笑っていたり、なにやらSNSに

書き込みをするような客も――。

古森「で、誰に投票したの？」

新井戸「え？」

古森「投票したんだろ？」

新井戸「あ、ああ」

古森「で、誰？」

新井戸「わかんねえ」

古森「ハ？」

新井戸「誰なのかわかんねえけど、ひらがな

で一番書きやすい人にした」

古森「ひらがな？ ひらがなって――」

古森、スマホで検索。

古森 「（結果を見て）オイオイ、まさか——」

○ 選挙ポスター掲示板

プロレスラーのような色黒サングラス姿の男性・ぴよん（46）の笑顔とともに『ぴよん46歳』『政治に辛口、国民に超甘口！』『比例代表は超甘党とお書き下さい』の文字。

○ 新井戸の家・リビング（数日後・朝）

ローテーブルには宅配ピザの残骸やシャパンボトルが何本か。

朝まで吞んでいたのか床で寝ている新井戸と古森。

インターフォンが鳴る。

二人とも起きない。

もう一度インターフォンが鳴る。

新井戸、ムニヤムニヤと目を覚ます。

○ 同・玄関（朝）

寝ぼけ眼の新井戸が扉から出て来る。

中性的でガリガリの男性秘書・大口（4

0）がいて、

大口「朝早くから申し訳ございません。ワタクシ、ぴよんの秘書をやらせていただいて
おります、大口と申します。失礼ですが、

アライド様で——？」

新井戸「はい、そうですけど」

大口「ああよかったア。せんせえ。先生の
おかげで今回の選挙は圧勝させていただきました
ましたア」

新井戸「せ、せんせえ？」

大口「もうワタクシどもからしたアライド先生、
いやもう神様、アライドシン様と呼ば
せていただいても過言じゃありません」

奥から古森が目こすりながら来て、

古森「ナニナニ？ 誰？」

大口「あら、ご兄弟？」

新井戸「いや、古森っていう、友達で」

大口「ご友人の方ですか。ワタクシ、ぴよん

の秘書をしております大口と申しまして、
ぜひとウチのぴよんが、アライド先生に
お会いしたいと申ししております」

古森「ぴよん？　オイオイ、ぴよんって、ま
さか——」

大口、手の平で路上を示す。

そこには黒塗りの高級車が。窓が開き、
常にサングラス姿のぴよん（46）が顔
を出す。

○ 走行中の高級車・車内（朝）

運転席に大口、助手席に古森。

後ろの席にぴよんと新井戸。

ぴよん「せんせえ。先生のおかげで今回、当
選させていただきました」

新井戸「は、はあ」

ぴよん「ところで先生は今、お仕事は何を？」

新井戸「（小声で）むしよく」

ぴよん「ムシヨ？」

新井戸「あーいえ、事務職を、少々」

ぴよん「ほう、それはちょうどよかった。先生、ぜひとも私にお力をお貸してください」

新井戸「チカラって――？」

○ ぴよんの事務所（数日後・午前）

職員として働いている新井戸と古森。

書類にひたすらハンコ押してる新井戸。

古森は壁にポスターを貼っている。

新井戸、手を止めて、

新井戸「なんで俺たちがこんなことやってんだろ」

古森「無職よりはいいだろ？」

大口、取材クルーと入って来るなり、

大口「せんせえ、雑誌の取材が」

新井戸「取材？」

○ 同・応接室（午前）

ソファ椅子に座っている新井戸が写真撮影とともにインタビューを受けている。

取材者から「ゴールデンチケットに選ば

れた感想は？」「どうやって投票先を選んだのか？」などの質問が。戸惑うように答えている新井戸。

それを隅っこで見学している大口と古森。

○ 市民会館・車寄せ（数日後・昼）

町の有力者風の一団が車を待っている。

黒塗りの高級車が来て、ぴよんと、新井戸が降りて来る。

有力者風の一団が待つてましたとぴよんと新井戸を迎い入れ、握手を求める。

古森と大口が車の中から、その様子を見ている。

○ テレビ局・スタジオ（数日後・昼）

バラエティ番組の収録中。

ボードに『初代ゴールデンチケットの新井戸宅さん』の文字。

ゲスト席に座っている新井戸が、豪華芸能人たちから様々な質問を受けている。

それを現場の隅っこで見学している大口
と古森。

古森「あいつはいつか大物になるって思っ
てましたよ」

大口「ハイ？」

古森「小中高と同じ学校で。野球やってたん
ですけどね、俺がキャッチャー、アイツが
ピッチャーで。イイ球投げるんだあ」

大口「（冷ややか）……」

○ 新橋の駅前（数日後・夕方）

ぴよんの街頭演説の準備中。

新井戸と古森がのぼり旗を立てている。

新井戸、手を止め、

新井戸「あゝあ。もう俺たち完全に超甘党の
一員じゃん」

古森「ハイハイ、スターは文句言わない」

新井戸「俺のどこがスター（と言い掛け）」

女子高生A・Bが新井戸に近づき、

女子高生A「あの、もしかして、ゴールデン

チケットの方ですか？」

新井戸「ハイ？」

女子高生B「いまSNSでバズってて、もしかしたらって——」

古森「ああそうそう、こいつ、初代ゴールドンチケット」

女子高生A「うっそ〜！ ヤツバ！」

女子高生B「写真イイですかあ？」

と言うが早いかパシャパシャ新井戸を撮ったり、スリーショット撮ったり。

○ 同・壇上（夜）

ぴよんが街頭演説をしている。

ぴよん「私が当選したのは、みなさんの力あつてのこと！ 本当にありがとうございます！
いました！」

まばらな聴衆。パラパラの拍手。

ぴよん「しかし！ しかしなによりも私が当選したのは、この人のお力もすごかった！ 紹介しましょう！ 日本でたった一

人！ 唯一無二のゴールデンチケット！

新井戸宅先生です！」

新井戸、恐る恐る壇上に上がる。

急に大歓声。

通行人も「あれ、ゴールデンチケットじ

やね？」「ヤバッ」と集まって来る。

ぴよん「先生！ 私よりも人気じゃないですか！」

聴衆から笑い。

新井戸はペコペコと恐縮。

ぴよん「先生、国民の皆様に、なにか一言」

新井戸、ぴよんからマイクを渡される。

しかし緊張から何も言えない。

ぴよん、すぐにマイクを引き取って、

ぴよん「大観衆を前にさすがに緊張なさっているようですね！ でもね、私はこちらにいらつしやる新井戸先生から教わりましたよ！ この世に価値のない人間なんて一人もいないんだと！ 我々の一人ひとりがゴールデンチケットなんだッ！」

大歓声。

聴衆の「アライド」コール。「アライ
ド！ アライド！」

新井戸の困惑顔と、ぴよんの満足気な顔。

○ 高級料亭・個室（夜）

席にぴよん、大口、新井戸、古森。

古森が「旨い旨い」とバカ食いしている。

ぴよん、大口に目くばせ。

大口、察して、古森に、

大口「古森さん、ちよつと」

古森「ん？」

大口「料理の追加注文を、一緒に」

古森「おう！」

大口と古森、個室から出ていく。

ぴよん、新井戸のお猪口に酒を注いで、

ぴよん「先生。先生とこれから語るのは、未
来のお話です」

新井戸「未来？」

ぴよん「これから我々が上を目指していくた

めにも、ぜひとも先生には、本格的に政治家になっていただきたい」

新井戸「いや、僕に、政治なんて――」

ぴよん「先生。政治はなにも難しいものではありません。政治というのはずばり人気のことなんです」

新井戸「人気」

ぴよん「私がどうして『ぴよん』なんてふざけた名前で政治活動をしていると思いますか？」

新井戸「（少し考え）若年層を、取り込むため？」

ぴよん「（正解に口元を緩め）先生。政治家になれば、もうカネについて心配することはありません。カネどころじゃない。地位や名誉だって手に入る。もう一生、仕事を探さなくたっていいんです」

新井戸「（唾をぐくり）」

ぴよん「ただし先生。先生が政治家になるためには、一つだけ条件があります」

新井戸「条件？」

ぴよん「古森さんを切っていただきます」

新井戸「こ、古森を？ 切る？」

ぴよん「彼には何ありません。彼はハッキリ言ってお荷物です。この世界では、利用価値のない人間を友達とは呼びません。先生、お友達はこれから作るんです。古森さんとの縁は、今日限りで切りましょう」

新井戸、頼るようにお猪口を取り、酒を一氣にあおる。

ぴよん「先生。あなたはゴールデンチケットなのです。日本で唯一、あなただけが選ばれた。このステータスを活かすのは今です。今しかありません。次の選挙でまたゴールデンチケットが生まれれば、話題は必ずその人物に向かいます。もうあなたじゃない。あなたには賞味期限がある。今だ。今しかない。古森を切って政治家になるか。これまでの無価値な人生をまた送るのか。先生ッ！ ご決断をッ！」

新井戸「……」

小さく聴衆の歓声が聞こえる。

それが次第に大きくなって――。

○（新井戸の夢の中）街宣車の上（夜）

溢れる聴衆。

新井戸が街頭演説のマイクを握っている。

新井戸「なにシケたツラしてるんですか！

円安？ 物価高？ カネが無いからなんで

すか！ 仕事が無いからなんですか！

我々には生きる価値がある！ 我々の一人

ひとりが、ゴールデンチケットなんだア！」

大歓声。拍手喝采。

新井戸、拳を天に掲げる。

○ 新井戸の家・リビング（数日後の朝）

床で拳を掲げるように寝ている新井戸。

キッチンから料理を作る音がする。

フライパンをカタカタと。

その気配で新井戸が目覚めます。

新井戸、目をこすりキッチンを見る。

キッチンから古森が来て、

古森「お、起きたか。今メシ作ったから」

と、ローテーブルの上に大皿のもやし炒めを置く。

古森「しっかしお前もバカだよな。政治家になるの断るなんて」

古森、水やら箸やら甲斐甲斐しく用意しながら、

古森「あの人の下で働いてたら、一生安泰だったのに」

古森、リモコンでテレビを点け、ザッピングしながら、

古森「メディアへの露出が減った途端、世間もすぐにゴールデンチケットのことなんか忘れちゃったしな」

古森、ようやく落ち着いて座って、

古森「さ、食べようぜ」

新井戸「古森」

古森「あ？」

新井戸「いただきます」

古森「おう、いただきます」

古森、食べながら、

古森「食ったら今日もまた仕事探しですか。

やれやれ、本当に世の中、カネだよなあ」

新井戸「（フツと笑い）……ああ」

戸棚の上の写真立て。笑顔で写るバッテリーの写真。

（完）